張赫宙と著作年譜

任　時正

「私は小説家より考古学者になりたがったし、その方がずっと幸せだったと思っている。[1]」と、言ったのは五〇年あまり文筆活動を行っていた内地作家張赫宙である。彼を「内地作家」と呼ぶのは張赫宙にとっての日本は他国ではないと思われるからである。張赫宙、本名張恩重は一九〇五年一〇月一三日朝鮮の南東に位置した慶尚北道大邱で生まれた。父は地方の大地主であった。恩重が生まれてまもなく母と父が離別、母は恩重を連れて家を出る。これは当時の朝鮮では珍しいことであった。女の子ならともかく男の子を離別した母方が連れて行くということは、普通では考えにくい。（もしかすると、彼の母は妾であって父と本妻の間に男の子が生まれたのかも知れない。）

一九一三年慶州公立普通学校へ入学した恩重は彼の人生に大きな影響を与えた人に出会う。大阪金太郎がその人である。大阪金太郎は当時、慶州博物館の仕事をやりながら、公立普通学校で校長を兼任していた人物である。大阪金太郎の古跡と朝鮮の説話に対する関心は深いものであった。大阪金太郎との出会いについて張赫宙は次のように言っている。

古跡保存会や博物館の初代館長を、その当時小学校の校長だった大阪金太郎氏が兼任していた。教育事業より古跡保存に熱心だった先生の目にとまったのが私である。未発見遺跡の探検には必ずお伴をさせられた。その都邑の内外に保管されている遺跡のすべてに私の手垢がついている。小学校五年からである。考古学者の卵を養成する目的をもって、二年間研修の制度を持つ簡易学校を先生は創設した。私はその学校の生徒となり、石膏細工を勉強した。[2]

教育というのは文字を教え知識を与えることだけではない。教育者の持つ考え方などをも伝達するものである。大阪金太郎は教育事業より、遺跡に熱心だった。しかし、学生たちが大阪金太郎から学んだものは考古学だけではなかった。

朝鮮の三国時代に新羅という国があった。その新羅の初代王である朴赫居世はどこからでもなく現れた卵から生まれた。そして四代王である脱解王も東海岸に流れて来た籠のなかにあった卵か

ら生まれた。森林で見つけた金の箱にあった卵から生まれたのは金王である。この説話の舞台となっているのがちょうど張赫宙の住んでいた慶州の周辺である。張赫宙らの遠足先は説話に登場する人物や物などと関わりのあるところばかりだった。その遠足先に引率したのが大阪金太郎である。大阪金太郎は学生たちに説話を聞かせるのが好きだった。慶州周辺の説話もよく語っていた。そして説話はいつも次のことばで終わる。

要するに、三王と呼ばれている赫居世、脱解、閼智、みな辰韓六部の人ではないということである。三王はいずれも外来の人である。そして、私は日本から来たものと思って。

この大阪金太郎のことばを張赫宙は次のよう補足している。

今すこし論理的にいうならば、日本列島に渡ったあるグループの一支流が新羅にきて支配者となった、といいたかったのであろう、と私は考える。というのは、この仮空の結論に、私は異論なく、同意するからである。[4]

八歳から日本語を学び一二歳に大阪金太郎と遺跡を求め歩いていた張赫宙。このような彼にとって「内鮮一体」は当然のことのように思われたのである。彼にとって朝鮮とは日本であって、日本はまた朝鮮でもあった。

私は飢えに斃れてゆく人々の哀れというのにはあまりにも悲惨な事実に直面して心身が抉りとられるような苦痛を禁ずることが出来なかった。そしてその苦痛はずっと後になっても感じないばかりか、同様な悲惨事が都市にも随所散見されるにつれて何とかしてそれを表現しないでは居られないのであった。そうして出来たのが「餓鬼道」と題する作品でそれが私の出世作となったが、私はそれを書く時、巧みな小説にする意志よりただ真実をありのままに書きたいという行動にかり立てられていた。[5]

張赫宙は一九三二年四月、雑誌「改造」の懸賞創作に応募した小説「餓鬼道」が二等当選したことで日本の文壇に登場した。「内地作家」張赫宙の誕生である。しかし、朝鮮に住んでいた張赫宙がどうして朝鮮ではなく日本で作家活動を始めたのか。その理由を次のように言っている。

朝鮮の民族ほど悲惨な民族は世界にも少ないです。私はこの実状をどうにかして世界に訴えたい。それには朝鮮語では範囲が狭小である。その点外国語に翻訳される機会が多いから、どうしても日本の文壇に出なくてはならないと思いました。[6]

筆名「赫宙」（宙に光り輝く）からも伺えるように張赫宙の作家としての意気込みは相当なものであった。その勢いで朝鮮を題材とした作品を書き続け、日本文壇で注目を浴びることとなった。

一九五二年一〇月日本へと帰化、戸籍名を野口稔とし、一九五四年一月、筆名を野口赫宙と改めた。この時から彼は、もっとも日本的なものが書きたい、いや書かねばならないと考え、小説の題材を朝鮮から日本へと換えて行った。「日本的なものを書かなければ、」という焦りが作家野口赫宙を朝鮮人でも日本人でもない曖昧な存在として行ったと考えられる。この頃から作品は、ミ

ステリもの、歴史もの、社会性の強いもの、紀行文へとその興味の幅を広めて行った。

一九三〇年小説「白陽木から[7]一九八九年『マヤ・インカに縄文人を追う』[8]まで、彼の作品のなかに潜んで流れているものそれは、「弱い者」に対する愛情である。「滅びるものをかわいそうと思う心が私にものを書かせる」[9]と言った作家張赫宙は一九九七年その一生を終えた。

（1）野口赫宙『マヤ・インカに縄文人を追う』（一九八九年六月・新芸術社）
（2）野口赫宙『韓と倭』（一九七七年一〇月・講談社）
（3）（2）と同じ
（4）（2）と同じ
（5）張赫宙『孤児たち』（一九四六年一一月・万里閣）
（6）張赫宙「僕の文学」（一九三三年一月・改造）
（7）張赫宙「白陽木」（一九三〇年一〇月・大地に立つ）
（8）（1）と同じ
（9）ウルトラシルバー（一九九一年一一月・オール生活）

朝鮮語の作品は★［　］と表し、筆者（任時正）未確認のものには＊印をつけた。作品名は「　」、発表紙誌は（　）と表した。

▼作品年譜▲

【一九三〇年】
・小　説：一〇月、「白陽木」雑誌（大地に立つ）筆名張赫宙。

【一九三二年】
・小　説：四月、「餓鬼道」雑誌（改造）「改造」懸賞創作二等当選作、作品集『権といふ男』に収録。六月、「迫田農場」雑誌（文学クオタリイ）。一〇月、「追われる人々」雑誌（改造）エスペランド語・中国語翻訳、発禁処分。

【一九三三年】
・小　説：五月、「兄の足を裁る男」雑誌（文芸首都）、作品集『権といふ男』に収録のさい「兄の脚をきる」と改題。九月、「奮い起つ者」雑誌（文芸首都）。九月二〇日～一九三四年五月一日、★［무지개］新聞（東亜日報）、日本語訳［虹］、発表された初の朝鮮語作品。一二月、「権といふ男」雑誌（改造）、作品集『権といふ男』自選集『愚劣漢』に収録、中国語翻訳。
・評論類……一月、「僕の文学」雑誌（文芸首都）。二月、「特殊の立場」雑誌（文芸首都）。九月、「優秀より巨大へ」雑誌（文芸首都）一〇月★［무지개］를 쓰면서］雑誌（三千里）日本語訳［「虹」を書きながら］。一〇月、「翻訳の問題・其

の他」雑誌（文芸首都）。一一月、「現在における文芸上の我が立場・主張」雑誌（文芸）。一二月、＊「秋日秒」（文芸首都）。

【一九三四】

・小　説：一月、「女房」雑誌（文芸首都）。三月、「ガルボウ」雑誌（文芸）、作品集『権といふ男』自選集『愚劣漢』収録。五月、「山犬」雑誌（文芸首都）、作品集『仁王洞時代』収録。六月、「劣情漢」雑誌（行動）、作品集『仁王洞時代』収録のさい「劣情者」と改題。八月、「葬式の夜の出来事」雑誌（文芸）。八月、＊「或る兄弟」雑誌（児童）。九月二十二～一〇月五日、★「恋風」新聞（朝鮮日報）、「現代朝鮮文学・短編集中」収録。九月二六日～一九三五年三月二日、★「三曲線」新聞（東亞日報）、「現代長編小説全集・第八巻」収録。一一月、「十六夜に」雑誌（文芸）、作品集『仁王洞時代』自選集『愚劣漢』収録。一一月～一九三五年、＊「霊と肉」雑誌（児童）、作品集『仁王洞時代』収録のさい「幼年時代」と改題。

・評論類：四月、「西洋文学過讃批撃」雑誌（文芸通信）。四月「我が抱負」雑誌（文芸）五月、★［내가읽는新聞小説］雑誌（三千里）日本語訳［私が読む新聞小説］。五月、「潔白性」雑誌（文芸通信）。六月四日、「綱引き」新聞（帝国大学新聞）。七月、＊「随筆雑感」雑誌（麺麭）。八月、＊「「死なす」について」雑誌（浪漫古典）。九月、★［災地瞥見］雑誌（三千里）。一〇月、「素朴非素朴」雑誌（文芸首都）。一一月、★［崔貞姫씨의「洛東江」을읽고］雑誌（三千里）日本語訳［催貞姫さんの「洛東江」を読んで］。

【一九三五年】

・小　説：一月、「一日」雑誌（改造）、作品集『仁王洞時代』収録。三月、「愚劣漢」雑誌（文芸）、作品集『仁王洞時代』自選集『愚劣漢』収録。三月、★［새뜻］雑誌（三千里）日本語訳［新しい意志］。五月、「あらそひ」雑誌（文芸首都）、作品集『深淵の人』収録。八月、「墓場に行く男」雑誌（改造）。八月、★［늙대］雑誌（三千里）日本語訳［山犬］。九月、「美佐子」雑誌（若草）。一〇月、「口惜しがる」雑誌（若草）。

・評論類：二月、「私に特望する人々へ」雑誌（行動）。二月、「質問」雑誌（文芸通信）。三月九日～一一日、＊「出京随想」新聞（都新聞）。四月一六日、「朝鮮の春」新聞（京都帝国大学新聞）、随筆集『わが風土記』収録。六月、★［天才와文筆］雑誌（三千里）日本語訳［天才と文筆］。七月、「初めて出会った文士と当時の思い出」雑誌（文芸通信）。八月、「送り仮名のこと」雑誌（文芸通信）。八月、＊「文学を志す人々へ」雑誌（文学案内）。八月、「ある感覚」（文芸首都）。八月、「チョング・マンソーの話」雑誌（文芸）。一〇月、「朝鮮文壇の現状報告」雑誌（文学案内）。一〇月、＊「文学の甘さ」雑誌（麺麭）。一〇月、★［文壇ペスト菌］雑誌

（三千里）。一一月、「朝鮮文壇の将来」雑誌（文学案内）。

【一九三六年】

・小　説：一月、★［契約］雑誌（三千里）。一月、「山男」雑誌（新潮）。一月～二月、「アン・ヘエラ」雑誌（文学案内）、作品集『愛憎の記録』収録。一月～九月、★＊「谷間の情熱」雑誌（四海公論）。三月、＊「狂女点描」雑誌（文芸首都）。五月二四日～八月二七日、★［黎明期］新聞（東亞日報）。九月、「飢ゆる人民」雑誌（労働雑誌）。九月、「深淵の人」雑誌（文学案内）、作品集『深淵の人』収録。一一月、＊「或る時期の女」雑誌（文芸首都）。一一月、「月姫と僕」雑誌（改造）。

・評論類：一月、「作家としての心構え」雑誌（新潮）。一月六日、★［林書房］新聞（東亞日報）。四月、「私小説私見」雑誌（文芸通信）。六月、＊「朝鮮文壇の作家と作品」雑誌（文学案内）。八月、「ゴルキイの明るさ」雑誌（文学評論）。八月、＊「文学的生活のこと」雑誌（文芸）。八月、「夏の朝鮮の風景」雑誌（新潮）、随筆集『わが風土記』収録。八月、＊「東京へ来て虚無を感じる」雑誌（文学案内）。八月、★「朝鮮을題材로한것이어야」雑誌（三千里）日本語訳［朝鮮を題材としたものこそ］。一〇月、＊「蛇毒」雑誌（サンデー毎日）。一二月、＊「独特の作風・理論の貧困」雑誌（文学案内）。一二月、＊「北条民雄のこと」雑誌（文芸首都）。一二月二日、「朝鮮の冬」新聞（帝国大学新聞）。

【一九三七年】

・小　説：一月、「酔えなかった話」雑誌（文学界）、作品集『愛憎の記録』収録。一月、★＊［그는왜죽었나］雑誌（風林）日本語訳［彼はなぜ死んだか］。二月、＊「出られぬ淵」雑誌（若草）。五月、「愛怨の園」雑誌（文芸）、作品集『春香傳』収録。六月一六日～一一月六日＊「痴人浄土」新聞（福岡日々新聞）、作品集『痴人浄土』『白日の路』収録。一〇月、「憂愁人生」雑誌（日本評論）。

・評論類：一月、＊「我が散策」雑誌（文芸首都）。一月一一日、「花火の街」新聞（帝国大学新聞）。二月、＊「お正月」雑誌（文芸首都）。二月、＊「現代朝鮮作家の素描」雑誌（文学案内）。三月、「私の一番言ひ度こと」雑誌（文芸通信）。三月、＊「日記」雑誌（文芸首都）。三月一五日、「テーマ不明」新聞（帝国大学新聞）。四月、＊「日本の女性」雑誌（文学案内）。五月一日、「或る旅心」新聞（朝日新聞）。五月二八日、★［『旅地』を見て感じたこと］新聞（毎日申報）。六月、「朝鮮人聚落を行く」雑誌（改造）。一一月、＊「満州移民について」雑誌（文芸首都）。一二月五・六・七日、＊「献金と文化」新聞（都新聞）。

【一九三八年】

・小　説：三月、「春香傳」雑誌（新潮）、作品集『春香傳』『沈清傳』収録。六月、「雰囲気」雑誌（文芸）、作品集『路地』収録。一〇月、「路地」雑誌（改造）、作品集『路地』収録。

・評論類：一月、★＊［旅行小話］雑誌（三千里文学）。二月、「私の風土記」雑誌（文芸）。二月七日、「李致三」新聞（帝国大学新聞）。三月、「「春香傳」について」雑誌（テアトロ）。三月一四日、「哀愁と愛着」新聞（帝国大学新聞）。三月二五日、「教育・雑誌時評」新聞（朝日新聞）。四月一一日、「春香傳評とその演出」新聞（帝国大学新聞）。五月、★［나의作品記］雑誌（三千里）日本語訳「私作品記」。五月二六・二七日、「反感と苦笑い」雑誌（都新聞）。七月一一日、「ツルゲネフー的通俗」新聞（帝国大学新聞）。八月、★［洛東江과望既］雑誌（三千里）日本語訳［洛東江と望既］。一〇月四日、＊★［朝鮮と春香傳］新聞（京城日報）。一一月、＊「将棋」雑誌（文芸）。

【一九三九年】

・小　説：一月、「加藤清正」雑誌（文芸）。一月～二月、★［加藤清正］雑誌（三千里）、雑誌「文芸」と当時掲載。一一月、「加藤清正」雑誌（テアトロ）。

・評論類：二月、＊「プック・レヴユウ」雑誌（文芸首都）。二月、「好い古癖」雑誌（新潮）二月、「朝鮮の知識人に訴ふ」雑誌（文芸）。三月一三日、「朝鮮の知識人に訴ふの反響に答ふ」新聞（帝国大学新聞）。四月、＊「わが文学修業」雑誌（文芸）。七月一六・一七・一八日、「旅情」新聞（都新聞）、随筆集『わが風土記』収録。一〇月九日、「時事的な興味」新聞（帝国大学新聞）。一一月、＊「金剛山雑感」雑誌（朝鮮版モダン日本）。一一月、＊「私の小説勉強」雑誌（文芸）。一一月、「間島・図門」雑誌（改造）随筆集『わが風土記』。一一月二五日、「原野」新聞（三田新聞）。一二月、「文芸創造の母胎」新聞（東京朝日新聞）。

【一九四〇年】

・小　説：五月、「密輸業者」雑誌（改造）、作品集『愛憎の記録』収録。五月一三日～八月一五日、★［女人肖像］新聞（毎日申報）。七月、＊「慾心疑心」雑誌（文芸）、作品集『愛憎の記録』収録。七月、「二つの愛情」雑誌（月刊文章）。

・評　論：二月一七・一八日、「朝鮮文学界の現状」新聞（東京朝日新聞）。三月、★［朝鮮文学の新動向］雑誌（三千里）。五月、「朝鮮文壇の代表作家」雑誌（新潮）、随筆集『わが風土記』収録。五月七日、「朝鮮文学の流行」新聞（東京朝日新聞）、随筆集『わが風土記』収録。五月五日、「給食」新聞（日本読書新聞）。六月、★［「作品愛読」年代記］雑誌（三千里）。六月二六日、「文学の伝統」新聞（東京朝日新聞）。七月、「金剛山ほか」雑誌（早稲田文学）。七月、＊「寸感二つ」雑誌（月刊文章）。八月、★＊［佛国寺にて］雑誌（朝鮮版モダン日本）。一〇月、＊「正確なる理解」（知性）。

【一九四一年】

・小　説：一月、＊「沈清傳」雑誌（協和事業）、作品集『沈清傳・春香傳』収録。一一月、「仲違ひ」雑誌（現代文学）。

・評論類：七月、「慶州」雑誌（月刊文章）。一二月、「アンケー

ト」雑誌（現代文学）。

【一九四二年】

・小　説：一月、「南の使節」雑誌（現代文学）、作品集『和戦何れも辞せず』収録。一〇月～一九四三年二月、「花郎」雑誌（月刊文章）。

・評論類：一月、＊「戦いの意志」雑誌（文芸）。二月、＊「朝鮮文学の将来」雑誌（文芸）。三月、「その頃の思い出」雑誌（文芸首都）。五月、＊「マレー作戦報告を読んで」雑誌（文芸）。五月、「半島労働者の錬成る」雑誌（中央公論）。五月一四日、「読書たより」新聞（朝日新聞）。五月二〇・二一日、★［文学団体の統合］新聞（毎日申報）。六月一三日、★［開拓地視察報告］新聞（毎日申報）。九月、「栄興農業」雑誌（開拓）。一〇月、「皇道朝鮮の完成」雑誌（中央公論）。一一月、「ある力」雑誌（現代文学）。

【一九四三年】

・小　説：一月、「ある篤農家述壊」雑誌（緑旗）、作品集『岩本志願兵』収録。六月～一九四四年八月、＊「希望の家」雑誌（新女性）。七月、「新しい倫理」作品集『辻小説集』。八月二四日～九月九日、＊「岩本志願兵」新聞（東京朝日新聞）。九月七日～一二日、★［巡礼］新聞（毎日申報）。

・評論類：二月、★［徴兵制実施］新聞（毎日申報）、作品集『岩志願兵』収録。六月六日、「歴史에不滅할一瞬」新聞（毎日申報）日本語訳［歴史に不滅なる一瞬］。八月五日、「大御心への帰一―朝鮮の徴兵制実施一」新聞（朝日新聞）作品集『岩本志願兵』収録。八月六日、「皇民化の錬成へ―朝鮮の徴兵制実施二」新聞（朝日新聞）作品集『岩本志願兵』収録。一一月一日、＊「拘りのない気持」雑誌（文学報告）。一一月一一日、★［学徒兵出陳激励辞］新聞（毎日申報）。

【一九四四年】

・小　説：二月、「恩義」雑誌（新太陽）。

・評論類：一月十日、＊「朝鮮文学の新方向『海女』と『登攀』について」雑誌（文学報告）。四月二六・二七日、★［싸우는半島労務者들］新聞（毎日申報）日本語訳［戦う半島労働者たち］。八月～九月、「拓士送出」雑誌（開拓）。

【一九四五年】

・小　説：三月、「めくらの眼があいた話」作品集『大東亜民話集』

・評論類：三月一日、＊「焼跡」雑誌（文学報告）。一〇月二一・二三日、「噫朝鮮の運命」新聞（東京新聞）。

【一九四六年】

・評論類：一月一一月八日、＊「教員の立場」新聞（東京新聞）。

【一九四七年】

・小　説：二月、「人の善さと悪さと」雑誌（芸林間歩）。三月、「とこしえに」雑誌（小説と読物）。

・評論類：二月一七日、「文学の行方」新聞（東京新聞）。

【一九四八年】

・小　説：春、＊「ミヤの犯罪」雑誌（地上）。二月、「罪の行方」雑誌（時代）。

【一九四九年】

・小　説：二月、「地獄の女」雑誌（文芸読物）。六月、「偽善者」雑誌（小説界）。

・評論類：四月二八日、「わが念願」新聞（東京新聞）。

【一九五一年】

・評論類：七月、＊「韓国へのルポー」新聞（毎日新聞）。

【一九五二年】

・小　説：二月、「嗚呼朝鮮」雑誌（新潮）『嗚呼朝鮮』の第一章。四月、「部落の南北戦」雑誌（別冊文芸春秋）。五月、「避難民」雑誌（新潮）『嗚呼朝鮮』の第二章。六月、＊「ある犯罪」雑誌（文芸）。六月、＊「女間」雑誌（別冊文芸春秋）。

・評論類：三月、「在日朝鮮人の内幕」雑誌（新潮）。七月二日、＊「朝鮮人の騒擾について」新聞（夕刊新大阪）。四月二八・九・三〇日、＊「朝鮮人の反省」新聞（東京新聞夕刊）。九月、＊「釜山港の青い花」（面白倶楽部）。

【一九五三年】

・小　説：三月、「脅迫」雑誌（新潮）。八月、「昌子の場合」雑誌（新潮）。一〇月、「眼」雑誌（文芸）。

【一九五四年】

・小　説：一〇月、「戸籍謄本」雑誌（小説公園）。一一月、「権力者」雑誌（新潮）。

・評論類：七月、「あなたの心にきざす暗い影はなにか」雑誌（文芸）筆名野口赫宙。九月、「満州行」雑誌（新潮）。

【一九五五年】

・小　説：六月、「子への愛情」雑誌（小説公園）。八月、＊「選挙」雑誌（文芸）。

【一九五六年】

・小　説：八月、「天女の声」雑誌（小説公園）。

・評論類：五月七日、「私の心配・私の希望」新聞（日本読書新聞）。

【一九五七年】

・小　説：六月、「秋父夜祭」雑誌（キング）。

・評論類：一月二日、＊「感覚のずれ」新聞（東京新聞夕刊）。

【一九五八年】

・小　説：五月、「異俗の夫」雑誌（新潮）。

【一九五九年】

・小　説：五月、「キリシタン如来騒動」雑誌（宝石）。一二月、「零点五」雑誌（宝石）。

【一九六〇年】

・小　説：七月、「黒い渦」雑誌（宝石）。

【一九六一年】

・小　説：一一月、「新羅王館最後の日」雑誌（宝石）。

【一九六二年】

・小　説：七月、「赤い月餅」雑誌（宝石）。

【一九七七年】
・評論類：五月～八月、「アメリカインデアンに古代日本人の源流を探る」雑誌（歴史と旅）。

▼単行本著作年譜▲

【一九三四年】
・六月、作品集『権といふ男』（改造社）：「餓鬼道」「兄を　脚をきる」「少年」「山霊」「権といふ男」「ガルボウ」六編　収録。三二八頁B六判。

【一九三五年】
・六月、作品集『仁王洞時代』（河出書房）：「一日」「劣情者」「十六夜に」「山犬」「葬式の夜の出来事」「愚劣漢」「仁王洞時代」七編収録。四三一頁B六判。

【一九三七年】
・四月、作品集『深淵の人』（赤塚書房）：「深淵の人」「あらそひ」二編収録。一六二頁B六判。
・八月、単行本★＊『三曲線』（漢城書房）。

【一九三八年】
・四月、作品集『春香傳』（新潮社）：「春香傳」「憂愁人生」「愛怨の園」三編収録。三〇三頁四六判。

【一九三九】
・二月、作品集『路地』（赤塚書房）：「路地」「綱引」「李致三」「雰囲気」四編収録。一二六頁B六判。
・三月、単行本『痴人浄土』（赤塚書房）：二三七頁B六判。
・四月、単行本『加藤清正』（改造社）：四〇一頁四六判。
・一〇月、単行本＊『開拓地帯』（春陽堂書房）。
・一一月、単行本＊『美しき結婚』（赤塚書房）。

【一九四〇年】
・八月、作品集『愛憎の記録』（河出書房）：「密輸業者」「慾心疑心」「酔えなかった話」「アン・ヘエラ」「深淵の人」五編収録。二九〇頁四六判。
・一一月、単行本『田園の雷鳴』（落陽書房）：三三〇頁B六判。

【一九四一年】
・二月、朝鮮古典物語『沈清傳・春香傳』（赤塚書房）：「沈清傳」「春香傳」二編収録。一九七頁B六判。
・二月、単行本『人間の絆』（河出書房）：『人間の絆』第三部作の第一部。三〇四頁B六判。
・四月、単行本『悲壮の戦野』（落陽書房）：『七年の嵐』の第一部。六〇八頁四六判。
・五月、単行本『曠野の乙女』（南方書院）：三三二頁四六判。
・六月、単行本『美しい抑制』（河出書房）：『人間の絆』第三部　作の第二部。四一二頁B六判。
・一〇月、作品集『白日の路』（南方書院）：二六七頁B六判。
・一〇月、単行本『緑の北国』（河出書房）：『人間の絆』第三部作の第三部。三六一頁B六判。

【一九四二年】

・二月、単行本『孤独なる魂』（三崎書房）：三二六頁四六判。
・三月、単行本『和戦何れも辞せず』（大観堂）：『七年の嵐』の第二部。四五六頁四六判。
・五月、随筆集『わが風土記』（赤塚書房）：三三編の随筆収録。二三五頁四六判。
・九月、単行本＊『フンブとノルブ』（赤塚書房）。

【一九四三年】
・四月、単行本『開墾』（中央公論社）：三四七頁B六判。
・四月、単行本『幸福の民』（南方書院）：二八八頁B六判。
・一一月、単行本『浮き沈み』（河出書房）：三五三頁四六判。

【一九四四年】
・一月、作品集『岩本志願兵』（興亜文化出版）：「岩本志願兵」「新しい出発」「夢」「ある篤農家の述懐」「出発」五編収録。二四六頁B五判。

【一九四六年】
・一二月、単行本『孤児たち』（万里閣）：二七六頁B六判。

【一九四七年】
・一二月、単行本『人の善さと悪さと』（丹頂書房）：二三二頁四六判。

【一九四八年】
・一二月、自選集『愚劣漢』（富国出版）：「権といふ男」「ガルボウ」「葬式の夜の出来事」「十六夜に」「愚劣漢」五編収録。二七三頁四六判。

【一九四九年】
・三月、単行本＊『恩を返したツバメ』（羽田書房）

【一九五〇年】
・三月、単行本『秘苑の花・李王家悲史』（世界社）：二八七頁四六判。

【一九五二年】
・五月、単行本『嗚呼朝鮮』（新潮社）：二八五頁四六判。

【一九五四年】
・六月、単行本『無窮花』（講談社）：二七八頁四六判。
・一一月、単行本『遍歴の調書』（新潮社）：三〇五頁四六判。

【一九五六年】
・一月、単行本『若い女』（東方社）：一九二頁B六判。
・一一月、単行本『ひかげの子』（新潮社）：二二六頁四六判。

【一九五七年】
・六月、単行本『美しい抵抗』（角川小説新書）：一七八頁A六判。

【一九五八年】
・一〇月、単行本『黒い地帯』（新潮社）：三三五頁四六判。

【一九五九年】
・五月、単行本『ガン病棟』（講談社）：二五四頁四六判。
・一〇月、単行本＊『黒い昼間』（東都書房）。

【一九六一年】
・一〇月、単行本『武蔵陣屋』（雪華社）：三〇三頁四六判。

【一九六二年】
・二月、単行本『湖上の不死鳥』（東都書房）：一九二頁B六判。
【一九七五年】
・四月、単行本『嵐の詩』（講談社）：二七〇頁四六判。
【一九七七年】
・一〇月、単行本『韓と倭』（講談社）：二四四頁四六判。
【一九八〇年】
・一一月、単行本『陶と剣』（講談社）：二三〇頁四六判。
【一九八九年】
・六月、紀行本『マヤ・インカに縄文人を追う』（新芸術社）：二三七頁四六判。

年譜作成に当たって、白川豊著『植民地期朝鮮の作家と日本』（一九九六年七月・大学教育出版）、『昭和文学年表・全九巻』（明治書院）をおもに参考にした。

（いむ・しじょん　本学大学院博士後期課程）